令和７年度一般選抜個別学力検査【前期日程】「国語」

Ⅰ　（配点 90 点）　出典：ホイジンガ著・里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス』

「ホモ・ルーデンス」とは〈遊ぶ人〉のことで、オランダの歴史家ホイジンガは人間の本性は遊ぶことにあるとして、これを提唱した。本文は「遊び」の機能的および形式的特徴について論じている。「遊び」の第一特徴は「自由」な行為ということであり、それは単に命令などからの「自由」というだけでなく、本能や自然の営みの過程からも「自由」であるということである。けれども、「遊び」が文化的、社会的機能を有するようになると、第二義的に当為や義務のような概念に縛られるようになる。それにもかかわらず、文化的機能を有する「遊び」をなぜ相変わらず「遊び」と見なすことができるのか、がここでのテーマになっている。「遊び」の二つの異なる段階がどのようなものであり、その間に共通するより高次の特質を見出すことが、解答にあたっては必要になってくる。ホイジンガは前の方で述べたことを、後半で別の表現で説明し、議論を深めてゆく。やや専門的な文章だが、この叙述方法が判れば、内容そのものはそれほど難解ではない。解答者がこの叙述方法のことを気付けるように留意して、作問を行った。

問一　**A**　仮構　　**B**　陶酔　　**C**　崇高　　**D**　遊離　　**E**　圏外

漢字問題は単なる書き取りではなく、語彙力を測るものである。誤答の多かった（書けていなかった）「仮構」「崇高」「遊離」は人文系の文章によく出てくる語である。読書によって語彙力を伸ばしてほしい。

問二　「自然の営みの過程」が具体的にどのようなことを指すかは、直前や直後を見ても書かれていない。しかし、本文のなかに「過程」を探せば、「必要や欲求の直接的満足を求める生活過程」、「食物摂取、繁殖、保育といったような純生物学的過程」という表現が見いだせる。どちらも「自然の営み」なので、それらを解答すれば良い。

問三　（**a**）の「あらかじめ仮定された遊びの効用」とは、肉体的能力や取捨選択の能力の開発に「役立つこと」である。（**b**）は論理の組み立て方の誤りが誤った答えを導く、その過程について問うている。そもそも、本来明らかにされるべき「あらかじめ仮定された遊びの効用」を前提に議論を組み立てることは、本末転倒（結論の先取り）であるから、当然誤謬に陥る。「効用」を前提としてために導かれる、帰結としての誤謬とは「遊びにおける「自由」の否定」である。この誤謬に至る論理の組み立ての

過程を、答案に反映する必要がある。

問四　（**a**）の「遊びが文化的機能」になるとはどういうことか、という問も、本文の後半に「文化的機能のおかげで欠くべからざるものとなる」という表現があるので、その前の「共同体に対しては…」以降の表現を使用して、解答すれば良い。（**b**）の問の正答を導くには、「遊び」における「個人的（充足）」から「社会的」への段階の違いを理解しているかが鍵となる。そのために、問では「第二義的」の意味するところを明らかにするよう指示している。ただし、「第二義」という以上、「第一義」も対照して明示する必要がある。「遊び」の「第一義」は「自由」であり、それ自体が充足した行為なので、何かを課されたり縛られたりするわけではない。しかし、「第二義」として「社会や共同体にとって欠くべからざるものになる」と、結果として任意や義務のような概念と結びついてしまう、ということを述べれば良い。

問五　子供は「本物じゃないなと思っちゃうよ」と言ってるが、これは汽車ごっこが著者の指摘する遊びの特徴である「ただそのようにふるまっているだけ」(＝仮構の世界)であることを知っていることを意味する。しかし、「遊び」はそのことを棚上げして、「大真面目」で仮構の世界に入り込むのが特徴であり、子供もそうしていた。問は「著者の指摘する「遊び」の特徴、性格をふまえて」と指示しているので、これらの条件を解答に反映させる必要がある。子供がこのように文句を言ったのは、こうしたことを理解しない父親の介入によって、「仮構」の世界から「ありきたり」の生活に引き戻されたからである。この文句を言った理由について述べられていない答案が目立った。また解答内に「優位」「劣等」を含む答案が目立ったが、ここでは遊ぶことに対する価値評価を問うてはない。問の意図をよく汲んで解答してほしい。

問六　「遊び」は本来、自由であり、個人的充足を満たすものであり、ふざけたものでもある。しかし、「遊び」が文化的機能を担うようになると、「高級な形式に属し」、「聖なる領域の中にその場を見つける」ようになる。これをなぜ同じ「遊び」と呼び得るのかといえば、最終段落に見えるように、ひとえに「役立とうとしている目的」が「その場で役立つ物質的利益や個人的な生活上の必要を満足させるような領域を越えているから」である。この表現を答案に反映させれば、解答はそれほど難しくない。

Ⅱ　（配点 60 点）　出典：「しのびね」

「しのびね」は平安時代末期に成立したとされる、作者未詳の王朝物語である。いわゆる悲恋遁世譚で、「しのびね」とは悲恋に「しのび泣く」姫君のことを指すという。今回の出題箇所は、シンプルに、少将が、姫君に懸想し、なんとか、懇意になりたいというその一心で行動をおこしていくという場面であるが、この部分の一連の解釈を、現代的な社会的合理性をもって解釈している解答が目立った。たとえば、庵の人々に怪しまれないために少将は愛想を振りまいた、などといったものであるが、少将が自分より身分の低いもの達に対してそういった下手にでるような気遣いを装うとは考えにくい。古典文学の文章や単語を単に暗記するのではなく、現代社会とは違う価値観、世界観をもあわせて学ぶ、幅広い視野が求められる。

問一　短い語句の意味を問うもの。あまりできはよくなかった。基本的な古典単語であるが、文脈に応じた訳ができるよう、単語だけを覚えるのではなく文章の中で意味をとらえていく練習を重ねてほしい。

問二　比較的よくできていた。「立ち帰」るのは姫君である。今の庵が、もし物忌みなどの仮住まいで、それが明けて本宅に帰ってしまえば、もうどこの人だかわからなくなってしまう、それでは困る、と少将は懸念しているのである。

問三　問二を踏まえた問いで、とにかくこの庵に姫がいるあいだに、どこのどういう人がどういう事情でいるのかということを知っておきたい、と少将は考えたのである。「一目みたいから」という解答が見られたが、単に姿を覗きたいだけではない。

問四　姫の近くで宿直をすれば、姫の姿をみたり、言葉を交わしたりも出来るかもしれない。宿直は口実であるから「怪しまれないため」「警戒心を解くため」ということも解答に含められていて差し支えはないが、しかし「あやしまれないこと」それ自体が目的なのではない。あくまで姫君に近づくためである。少将は身分が高く、実際に、その前の箇所で、並々ならぬ人であるという受け止められ方がなされている記述があるので、少将自身が、相手の警戒心に配慮して策を弄したり、不躾でないように配慮したなどという、それだけを述べるような解答では不十分である。

問五　比較的よくできていた。本文を読み込み、少将の思惑まで書いている解答があったが、「しかしかのこと」と報告している側はそこまでわかっていないはずなので、姫君側の人間が把握した出来事として記すので十分である。

問六　一度見たことがあり、この庵で間違いないという確信があるためである。女房たちに怪しまれないためという解答が目立ったが、少将のような立場の人間が、相手の警戒心を解くために配慮して下手（したて）に出る、愛想のいい人間を装うといったようなことは考えにくい。少将はあくまで、姫に確実に近づいていけていることに高揚感を覚えていると読むべきである。

問七　（**a**）姫に会いたい一心で、焦がれる思いを訴える。袖の時雨は、涙である。古典文学、和歌では涙と袖をぬらすことの組み合わせはよくでてくる。

（**b**）次の問八にもかかわるが、若人は、そもそもこの庵に姫がいること自体、露見していない、させてはいけない、と考えているので、少将の訴えをはぐらかし、かわしているのである。あなたを姫に会わせるわけにはいかない、という解答が多かった。誤りではないが、会わせるわけにはいかない、ということは、姫がいると認めていることになる。しかし、若人はそれ以前に、そんな人はいないという体ではぐらかしており、従って、単に紅葉の景色のこととしてだけ、実景としての歌を返すのである。

問八　実はそれ以前に垣間見ていることをしらないので、なぜ少将は姫君の存在をしっているのか、不審におもっているのである。なお、若人とのやりとりで、歌もかわしているため、少将は、若人にも恋心をいだいたと読んだ解答があったが、誤りである。なお、問題では「かかる人」を明らかにせよとあるので、「そのような人」といった訳では不可である。

Ⅲ　（配点 50 点）　出典：〔宋〕葛洪『渉史随筆』

唐の玄宗の宰相であった韓休は、皇帝にも遠慮せず、少しでも過ちがあればすぐさま諫めた。やつれてゆく玄宗を見た側近が韓休を宰相職から降ろすよう勧めたところ、玄宗は、「自身がやせても、天下は豊かになってゆくだろう、韓休を用いるのは国家のためなのだ」と答えた。玄宗の名君ぶりを示す逸話である。主旨ははっきりしているので、想像で話を脱線させないよう、着実に筋を追って読んでほしい。

問一　基本的な読みを問うた。**a**「ひととなり」、**b**「すなはち」、**c**「いなや（と）」、**d**「のみ」。いずれも基本的な語であり、よくできていた。ただ、ｃは「いな」で止まっている誤答が見受けられた。「否」は、疑問文の文末に置き、疑問の語気を示す語で、「いなや」と読む。

問二　内容把握の問題。楽しまなかった理由は、少し前に示されている。帝が宴会や狩猟の際に少しでも過ちをおかせば、すぐに韓休から諫言の上奏文が届いたからである。常に言動を監視されていたのでは、せっかくの宴席や狩りも楽しめまい。「過差」は過ちのこと。宴会や狩猟自体を禁じたわけではない。

問三　現代語訳の問題。「どうして韓休の宰相の職を解かないのですか」のように訳せていればよい。韓休を辞めさせればいいじゃないですか、の意。

問四　内容把握の問題。「（韓休が宰相であることによって）わが身は痩せてしまっても、天下は必ず豊かになるであろう」ということが書けていればよい。さらに、「よって、韓休を追い払う必要はない」まで書かれていても、もちろん正解。宰相としての韓休の有能さを言っているのであって、「玄宗が質素倹約したから、天下が豊かになった」のではない点に注意すること。

問五　内容把握の問題。同じく宰相職にあっても、玄宗の意見に従うだけの蕭嵩と、徹底的に論争する韓休の対比を押さえておくこと。例えば、「韓休は皇帝に対しても忖度せず、厳格な態度で直言する人物で、自己の利益ではなく国のために議論をつくすため、信頼できると評価している」といった内容が書いてあるとよい。

問六　書き下しの問題。「身の為（なる）に非ざるなり」。すぐ上の「社稷の為なるのみ」と対になっていることに注意すること。「身」は自分。韓休を用いるのは国家のためなのであって、自分（玄宗）のためではないのだ、ということ。